

見ても、シオニズム誕生から一九四八年のイスラエル建国まで、聖書は大いにシオニズムに奉仕した。すなわちイスラエルの国内向け及び国外向けの主要談話——つまり神がアブラハムに約束した国とイスラエルが同じ国であるという談話を証明する役割を、聖書が担ったのだ。聖書の「イスラエル」とは七〇年にローマ軍に滅ぼされ、その民がエルサレムから追放・離散させられたという国のことである。そのときエルサレムの第二神殿が破壊された。その日はユダヤ教の記念日とされ、喪に服する日とされた。現在のイスラエルでもその日は国民の服喪日とされ、レストランなどあらゆる娯楽産業施設はその前夜から休業しなければならない。

この聖書談話が史実であると世俗的・学問的に証明しようという試みが、いわゆる聖書考古学（これ自体が矛盾語法的概念である。そもそも聖書はいろいろな時代のいろいろな人々によって書かれた壮大な文学作品であって、年代記とか歴史記録書ではないのだ）を援用して行われた。<sup>(1)</sup>この談話は七〇年にユダヤ民族がパレスチナから追放され、近年シオニストが帰還するまで、パレスチナはほぼ無人の地だったとする。しかし、シオニズム指導者はパレスチナが無人の地ではないことを知っていたし、そのため聖書の權威に頼るだけでは不十分だと思っていた。人が住むパレスチナに殖民するためには、先住民を追い出す、場合によっては民族浄化するなど、組織的で系統的な政策が必要であった。その意味でも、パレスチナ奪取をキリスト教の神聖なヴィジョンの実現として描くことは、キリスト教世界をシオニズム支援へ導くうえで、

たいへん重要であった。

既述したように他の候補地がすべて否定され、パレスチナだけがシオニズム事業の目的地となったとき、シオニズム先駆者から運動を引き継いだ指導者たちは、シオニズム運動を現実的・実践的な世俗運動に変え、次第に社会主義的、あるいはマルクス主義的イデオロギーを注入し始めた。世俗的・社会主義的・植民地主義的ユダヤ人事業を（神の御加護を得て）聖地で成功させることが、今や目的となった。植民地化された地の先住民はすぐに理解したが、入植者が聖書とか、マルクス主義とか、ヨーロッパ啓蒙主義を持ち込んでいろいろな理屈をこねようが、結局先住民の運命は他者によつて決められるのだ。問題は、入植者が描く未来社会の中には先住民も含まれるのか、含まれるとしたらどういう形で含まれるか、ということになる。その意味で、初期シオニズム運動の指導者や入植者が残した記録の中で先住民がどのように描かれているかは、非常に興味深い。先住アラブ人を障害物、外国人、敵と見る、偏執狂的な記録である。<sup>(2)</sup>

最初の反アラブ的記述が書かれたのは、まだコロニーや町へ向かうユダヤ人入植移住者たちがパレスチナ人から暖かくもてなされていた時期であった。入植者たちの不満は、初めての地で仕事や生活を維持する手段を探すことから生じた。コロニーへ行つても町へ行つても嫌なことと直面した。どこへ行つても、生きるためにはパレスチナ人労働者やパレスチナ人農民とい

sapientia  
サピエンティア 55

Ten Myths About Israel

# イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]



法政大学出版局